

隨泉寺寺報

平成22年(2010年)12月号 第484号

TEL 082-892-0217 <http://www.zuisenji.com/>

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

報恩講法要

講師 明円寺住職 竹田嘉円師

講題 『ぼちぼちいこう』

■報恩講 ～お取り越し報恩講～【ほうおんこさん】

報恩講は浄土真宗門徒(信徒)にとって、一年中でもっとも大切に、親しみ深い行事です。昔から【ほうおんこさん】と親しみをこめて呼ばれていました。【ほうおんこさん】が来ると年末を迎えたような、気ぜわしいような思いで迎えてくださいました。この間お参りに行ったらお仏壇がきれいにお磨きされていました。「いつもきれいにされていますね、おばあちゃんがされますか?」と聞いたら、「ほうおんこさんの時だけ《業者》の人にお任せしています。」といわれてびっくりしました。いつもはおばあちゃんがされるけれども【ほうおんこさん】の時には大切な法要だからわざわざ《業者》に頼まれるのです。きれいにお荘厳されて気持ちのよい【ほうおんこさん】でした。私も本堂をきれいにしようと。今年は赤いローソクでお飾りして待っていてくださったおうちも沢山あり、うれしく思いました。



12月の法座予定

- 12月12日……………掃除 出宮
- 12月14日昼席午後1時より……………報恩講法要
- 12月14日夜席午後7時より……………出張法座 出宮集会所
- 12月15日朝席午前10時より……………報恩講法要 おとき
- 12月15日昼席午後1時より……………報恩講法要
- 12月31日午後11時より……………除夜会・元旦会
- 1月6日午後6時より……………門信徒会本部役員会

☆ 菊花展・絵画・作品展

今年も例年のように菊花展・絵画・作品展を開催いたしました。今年は夏が猛暑で残念ながら菊花の生育が悪く、昨年のようにテントを張って展示することができませんでした。



しかし 真のように向拝や大玄関の前や山門のところに見事に飾っていただきました。ラムや保育園にこられた方が綺麗な菊が展示してあるという事で、山門をくぐって見に来られました。絵画や・作品も色々な物を展示していただき、本当に見事な作品ばかりで皆さん感激してみておられました。あまり素人離



れした作品ばかりなので、趣味で色々な物を作っておられる人は展示しにくいという意見もありましたが、どなたでも出品してください。恥ずかしいからとか、下手だからと言われますが、自分の一年間の作品ですから、生きてきた足跡だと思って、来年はぜひ皆さんも出品してください。

☆ 後期門信徒講座 役員研修会

今回は来年の親鸞聖人 750 回大遠忌の新しく制定された音楽法要の練習をしました。お勤めの漢文部分は今までの正信偈のおつとめですが、その後にご和讃が6首あります。あまり難しくはありませんが、初めてだと少し戸惑いますので、これから時々練習をしましょう。15日の朝席はお仏壇のお飾りや、作法の練習をしました。これも時々復習をしないと忘れてしまいますから、門信徒講座の時には練習していきたいと思えます。



15日の昼席は〈映画鑑賞〉をしました。『折れぬ梅』という映画を見ました。認知症の映画でしたが、題名の由来がわかりました。梅という樹は折れても花が咲くのだそうです。一部が枯れてきても残った部分で綺麗な花をつける。老いてもその木全体がだめになるのではなくそれなりに美しい姿を現すのです。

《老い》は誰にもやってきます。老いたら全部だめなのではなく、それなりに実をつけ花を咲かす。それを認めて共に生きるという素晴らしい内容でした。

映画を見て下さった皆さんも感動され、《たまには映画もええよのお、ちょっと身につまされたが、おもしろかった。》と喜んで下さいました。もっとも続けて《住職のわけのわからん法話よりよっぽどいい(笑)》と言われたのにはがっかりしましたが……。

☆御礼

永代経懇志 金 拾萬円 川崎久美殿 故 川崎裕文様 特 永代経志として

十二月

浄土真宗は 大乘のなかの 至極なり

『親鸞聖人御消息』（註釈版聖典 737 頁）

釈尊が涅槃に入られた後、修行者は、釈尊と同じように戒律を守り、修行をしていました。ところが、数百年経つと、彼らは自分の修行を熱心にしても、一の人々に教えを伝え、導くことが少なかったようです。

釈尊は、三十五歳でさとりを開かれた後、四十五年にわたって人々をさとりの境地に導かれました。釈尊の精神は、自分だけがさとりに至ることではなく、自分も、他の人々も、ともにさとりの道を進むことであるとして、在家の信者が新たな仏教の活動をはじめ、大乘仏教と名のりました。そして、当時の修行者を中心とした仏教を批判して、修行者しか乗れない小さな乗り物、即ち「小乗」であるとし、「大乘」こそが釈尊の精神を受け継いだ仏教であると置づけました。この「大乘」が日本に伝わった仏教です。

「小乗」というのは「大乘」の側からいったことで、当時の修行者中心の仏教がみずからを小乗ということはありません。彼らも、大乘仏教に対する批判はあります。ただ、「誰でももの仏教」とでもいえる大乘の見解は、修行者でない私たちにとって素晴らしいものです。

阿弥陀仏の四十八願の中の第十八願は、私たちが信心と念仏によって往生できることを誓った願です。第十八願の最後に「五逆と正法を誹謗するものを除く」とあります。五逆とは、五つの重罪という意味です。大乘仏教でいう五逆とは、父、母を殺すなどの社会的な罪悪と因の道理を信じない、出家者の修行を妨げるなど仏教を否定することを指します。正法を誹謗するとは、正しい教えである仏教を誹謗することです。

確かに「除く」のが当然のようですが、親鸞聖人は、中国の善導大師の意向をうけながら、五逆と正法を誹謗することは大きな罪であることを知らせて、「一切の衆生をもらさず」救うと示されます。

自分自身の生活を振り返ってみると、人にいえないことを思うこともあれば、神も仏もあるものかという思いになることもあったかもしれません。五逆などを除くといわれると、私は本願の目当てではないこととなります。しかし、の観点から考えますと、もともと、さとりの境地に近い人は、仏の救いを当てにする必要はありません。さとりから遠いものが、仏の救いを必要としています。そうしますと、罪の重さを知らせて、みな救うという聖人の理解が阿弥陀仏の思いであったように窺えます。

浄土真宗とは、法語カレンダーの表紙の言葉にありましたように第十人願のこと



です。大乘が誰でももの仏教だとしますと、一切をもらさず救うという第十人願は、大乘の中の至極になります。

☆「さよならではなく、ありがとうの れ」

祖母の山本典子が亡くなり、今一度 たまたま制服のポケットから出てきた白骨章、還骨勤行を読みました。「さよならではなく、ありがとうの れ」とありました。息子二人眠っていて 私一人 彼女の遺体の顔の白い布をめくり、何度も「ありがとう」と言いました。背中の中の温度を確かめながら。「今ならまだわかる。」と思いの一心で。ある時、一生懸命酸素マスクで息をしていました。視点は合っていません。父の弟夫婦が、やっとかけつけました。私は兄弟愛を確かめる事もできました。生き抜くこと、あきらめない事、生きる喜び、絶対の命、有り難さを完璧にこの目で確認しました。いろんな事が人生です。それもこれも全てさせて頂いている喜びとして受け止めてみるのも楽しくていいなと思えました。

ご住職ありがとうございました。感謝。

孫 山本早苗

法名 釋最典 俗名 山本典子 平成 22 年 9 月 9 日往生 行年 82 歳

☆やさしい思い出をありがとう

飛行機に乗ったことがない私に「それなら飛行機で行こう」と、夫の提案で出かけた鹿児島旅行を思い出しています。

指宿名物の砂風呂に入り、それほ楽しい旅行でした。思い出と共に、夫のやさしさや気遣いが懐かしくい心によみがえります。

夫は、仕事の合間にさつき盆栽を楽しんでおりました。

剪定したり、形を整えたりと、かいがいしく世話をしていたものです。五十センチを越す大きな鉢に見事なさつきを咲かせ、さつきの品評会「きつき会」では何度も賞をいただきました。

趣味を同じくするお仲間も多かったようで、よき時間を共に紡いでくださった皆様には感謝するばかりです。

夫 純次は、平成二十二年九月十五日、六十六年の生涯を安らかに閉じました。病を得た晩年はつらかったでしょう。

「ちょっと早かったね…」 もう少し長生きして私と一緒に居てほしかったと思います。 れは悲しいのですが、かの地で幸せに過ごせるようにと願い、見送ります。

妻 近藤静江

法名 釋純淨 俗名 近藤純次 平成 22 年 9 月 15 日往生 行年 67 歳